

藤沢周平

闇の歯車



やみ はぐるま
闇の歯車
ふじさわしゅうへい
藤沢周平

講談社文庫

定価280円

昭和56年12月15日第1刷発行

昭和60年4月15日第7刷発行

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策・菊地信義

製 版 まゆら印刷株式会社

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

© Shuhei Fujisawa 1981

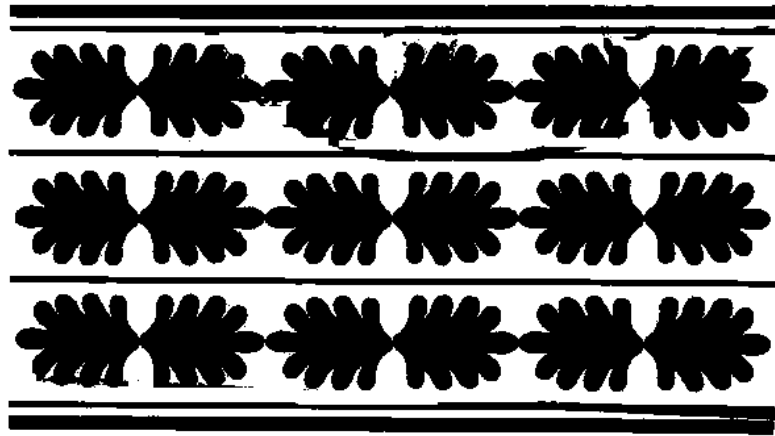
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-131734-2 (0)

闇の歯車

藤沢周平



目次

誘う男

酒亭おかめ

押し込み

ちぎれた鎖

解説
年譜

磯貝勝太郎

七

六

三

一七

三三

二〇

闇の歯車

誘う男

一

暑い夜だった。そして夜は始まったばかりだった。暑いので、どこの家も窓や戸を開けはなしている。そのため家の中の物音が外に筒抜けだった。瀬戸物を割った音、赤ん坊の泣き声、咳払い、女の笑い声などが、雑然としたざわめきになって、暑苦しく^{せむ}澱んだ路地の夜気を、たえずかきみだしている。

そのざわめきの中に、さつきから単調な女の声がまじっている。ここを開けておくれな、おまえさん。ちよつとでいいからさあ、話を聞いておくれよう。ねえ、たのむからあ。疲れきった女の声がそう言っていた。

——まだやっている。

佐之助は、畳の上に仰向けに寝たまま、ひと言ずつ語尾がのびる女の声を聞いている。女の声は、いまにも泣きそうに聞こえる。じっさい泣いているらしく、声は時どきとぎれた。そしてし

ばらくすると、また戸を叩き、哀れな声で家の中に呼びかける。来ると女は、およそ半刻はんとき（一時間）はそうしている。

佐之助は、女も、女がおまえさんと呼びかけている男も知っている。二人は三月前まで夫婦だったのだ。男は源助という手間取り畳職で、佐之助の家のはす向かいに住んでいる。

いつも少し俯うつむいて歩き、陰気そうに見える男だが、まじめな性格らしく、朝は六ツ半（午前七時）に家を出、夜も六ツ半（午後七時）にはきちんと家に帰ってくる。夫婦別れる前も、後も同じだった。途中で一杯やってくる様子もなく、そうして帰ってくると、夜はきつちり五ツ半（午後九時）に灯を消す。その時刻に源助は床につくらしかった。

——べつに、それほどいい男というわけでもないのにな。

と佐之助は思う。源助はむしろ醜男ふおとこの方である。大きく厚い唇を持ち、細い眼をして、佐之助と同じ二十六だというが、年よりは三つ、四つ老おけて見える。

佐之助がそう思うのは、いま「お願いだからさあ」と、戸を叩いている女が、色白でわりあいととのった目鼻だちをしているのを知っているからである。

おくみという源助の女房は、子供もないので同じ黒江町の端はすれにある「ひさご」という飲み屋で働いていたのである。おくみはそこで客の一人と浮気をしたのだ、と噂が あった。その噂が、夫婦別れる前からあったのか、別れたあとで出てきたものかは、佐之助は知らない。ただある朝、井戸端で顔を洗っていて、裏店うらだなの女房たちがひそひそとそう話しているのを、耳にはさるだけである。

——しかし、それにしても……。

たとえば浮気が事実だとしても、もうそろそろいいじゃないかと佐之助は思う。見たところ可愛い感じがする女が、なりふりかまわず訴えているのが哀れだった。この暑いのに、かたくなに戸を閉めきって開けようとしない、醜男の亭主を微かに憎む気持が動く。

だが、そう思うだけで、佐之助は暗い畳の上に、汗ばんだままじっと寝ている。どちらを向いても暑かった。窓は全部開けはなし、入口の戸も開いたままだが、風はそよりも入って来ない。動けば、汗がどつと流れ出そうで、佐之助はじっとしている。それでも背中あたりは、気味悪く汗がたまっていた。

女の訴える声は、佐之助にいつももう一人の女のことを思い出させる。闇の中にのけぞった白い喉を思い出させる。そして低い囁きが甦ってくる。どうしても、やめられないんですか。博奕をしちゃいけないなんて、言いません。ただこわいんです。いまに悪いことが起こりそうで、こわいんです。

女は佐之助を諫めたのではなかった。真実おびえていたのだった。佐之助は、女の訴えに取りあわなかった。取りあわなかったばかりでなく、小心さをからかったりしたのは、女のおびえの深さが見えなかったのである。小さな女だった。つましく、暮らし上手で、大風が吹いたと言っておびえ、雷が鳴ると顔色を変えた。女の訴えを佐之助はそういうものだと思っていたのである。

きえという女だった。いつも佐之助の身体の陰にかくれるようにしている女だった。しかしき

えは、突然に姿を消した。佐之助は、不意に頬を打たれたような驚きを感じた。そのときの驚きは、三年たったいまも、微かな痛みと一緒に、心のどこかに残っている。

きえのおびえは間違っていないかった、といまでは思う。いつでもやめられると思っていた博奕から、佐之助はついに一度も足を抜くことが出来なかったし、その間に賭場^{とば}で人を刺し、檜物師^{ひものし}という職も捨てた。そしていまは博奕よりもっと悪い仕事で喰っている。

「……？」

佐之助は半身を起こした。女の声が消えている。路地には、まだざわめきが続き、子供を叱る棘^{とげ}とげしい声や、物がぶつかった音、弱よわしく泣き続ける赤ん坊の声などが聞こえているが、その中から女の気配は消えていた。

肩を落として裏店の木戸を出て行く女の姿が見えるようだった。そういう姿の女と、外から帰ってきて偶然すれ違ったことがある。女は打ちしおれていて、佐之助を見もしなかった。佐之助も声をかけなかった。佐之助に限らず、裏店の者たちは、三日に一度ぐらい女が訪ねてきて、そうしているのを見て見ぬふりをしている。

佐之助は頭を振って、女の姿を払い落とした。それから立ち上がって台所に行くと、水を飲んだ。甕^{かめ}に溜^{ため}めてある水は、気味悪くぬるんでいたが、佐之助は息もつかずに柄杓^{ひしゃく}で二杯飲んだ。それから着ていた襦袢^{じゆばん}をぬいで、裸になると、水に浸した手拭いで肌を拭いた。いつときひやりとしただけで、肌はすぐになまあたにかい空気に包まれたが、それでもいくらか気分がさっぱりしたようだった。

茶の間に戻ると、佐之助は暗闇の中で浴衣を着、茶簞笥のひき出しから、手さぐりで匕首をつかみ取ると、懷に入れた。それから戸締りをして外に出た。路地には、家々から灯のいろがこぼれ、まだざわめく物音が続いている。裏店の者たちが、飯を喰い終り、床について、だんだんにそのざわめきが消えるまで、まだたつぷり半刻はかかるのだ。夜気は、そのころになって漸く幾分か冷えてくる。

佐之助は、足音を立てずに路地を抜けると、裏店の外に出た。星明りで、家の中よりは外の方がぼんやりと物が見える。佐之助は急ぎ足に黒江町の暗い町並みを東の方に歩いた。行く先は決まっている。

二

島田町の町並みを、木場に渡る筑後橋に抜けたとき、眼に不意に赤いものが飛びこんできた。木場の向う、六万坪の方角に、大きな月が出ているのだった。

——こいつは、まづいかね。

橋の上に立ち止って、佐之助は月を睨んだ。月はいまのぼったばかりで、少し形が歪み、気味が悪いくらい赤い色をしている。黒ずんで、血の色を思わせた。木立も屋並みも少ない扁平な木場の町が、その下に黒ぐろと静まりかえっている。

だが立ち止ったのは、僅かな思案の間だけだった。佐之助はすぐにもとの足どりに戻って、橋を渡ると、木場の中に入って行った。掘割にかかっている橋を、さらに二つ渡ったが、その間誰

にも会わなかった。一度だけ、堀に漬けてある材木に宿っていた鳥が、佐之助の足音を聞きつけ、たらしく、けたたましい声を挙げただけである。

夜の本場は野原に似ていた。ところどころに材木が山のように積み上げてあり、大きな店や人足小屋がその陰から現われるが、道はすぐに雑草が繁る野道になる。

漸く一軒の材木屋の前で、佐之助は足をとめた。間口の広い店構えで、店の横の材木置場には、幾山も材木が積み重ねてある。屋根と柱だけの小屋掛けが、置場の前に五つほどあるのは、昼の間人足がそこで茶を飲んだり、地べたに敷いた蓆じろの上にひっくりかえって休んだりするのである。

小屋も材木置場もひっそりしていた。幾分光を増した月が、そのあたりを鈍く照らし出しているだけである。店の中には灯がともっている。だが灯のいろが見えるのは、窓ひとつだけで、店は頑丈そうな雨戸を閉めまわし、佐之助がその横を通り抜けたときも、人声は聞こえなかった。

佐之助は、店の横から建物の裏手に回った。そこにもう一軒家があった。しもたや風の平家造りだが、大きな家だった。その家の横に、軒が高い納屋なやがそびえている。佐之助は真直納屋まうすくに近い。近づいた。

すると入口のそばから、男が一人立ち上がって佐之助を迎えた。佐之助より二つ、三つ若そうに見える男だった。それまで男は入口のわきにある石に腰をおろしていたようである。

「今晚は。遊びかい」

若い男は、佐之助の顔を確かめるとそう挨拶した。佐之助は首を振った。すると男の笑いが途

中で歪んだ。

「一石屋は、来ているかね」

佐之助は、男に身体を寄せ、すばやく紙にひねったものを男の手に握らせると言った。若い男はうなずいた。だが男の顔には、ありありと迷惑そうな表情が浮かんでいる。

「ありがとよ」

佐之助は、男の表情の中に浮かんでいる逡巡とおびえの両方を消してやるように、軽く背を叩いた。

「おめえに、迷惑はかけねえよ」

「あまり手荒なことは、しねえ方がいいぜ」

と、男は言った。入口に歩きかけた佐之助は、その声を聞くと振りむいて男の顔を真直みた。それから声を出さないで笑ってやった。男が息を呑んだ気配を背にして、佐之助は納屋の中に入って行った。

入ったところは土間だった。右手の柱にかけてある小さな懸け行燈が、そこに積んだり、掛けたりしてある物を照らしている。長柄の鳶口、藤縄、縄、藁束、大八車の輪などが雑然と置いている。突きあたりは粗い土壁で、壁の右端に、小さい潜り戸がある。どこからともなく、微かなざわめきのような物音が聞こえる。ざわめきは、むろん戸の向うから聞こえてくるのである。

佐之助は、音がしないようにそっと戸を引き、中に入りこんだ。そこは床を上げ、畳を敷いた座敷になっている。佐之助も何度か来ている賭場だった。元加賀町に住んで、木場人足を五、六

十人差配さはいしている庄兵衛という男が胴元で、庄兵衛は三崎屋というこの材木屋と縁続きだときいている。それだから、これだけ手のこんだ造作ぞうさくも出来たのだろう。

蠟燭ろうそくの光の中に、佐之助は庄兵衛の顔を捜したが、いなかった。いつもなら庄兵衛がいる、駒札こまを並べてある場所には、若い男が坐っている。今夜の賭場は、いま盆を仕切っている中年の中盆が差配しているようだった。佐之助が知らない男だった。中盆だけなら、挨拶はいらないと佐之助は思った。

佐之助は盆のまわりに立ったり蹲うすくまったりして、勝負を眺めている男たちの間に、目立たないように紛れこんだ。盆は熱が入っていて、佐之助に眼をとめた者は誰もいなかった。

首をのばして、佐之助は盆を覗のぞいた。すると、壺振りのすぐ横に坐っている一石屋の顔が見えた。田蔵という名で、十年ほど前には、自分で大八車を引いて材木を商っていた男である。だが、ここ五、六年の間に、急に商いが太くなって、いまは元木場の西永町に大きな店を構えている。やり手の材木商だった。

やり手だが、人間は汚い。遠慮はいらないから痛めつけてやれ、と仕事をくれた奥村は言ったのである。

立っている人間の間から、佐之助は一石屋の赫あから顔を見つめた。一応は商家の旦那らしく、膝をそろえて金を賭けているが、時どき顔をあげて中盆になにか言ったりする時、尋常でない険げんしい眼つきを見せる。大きな身体だった。

佐之助は辛抱づくよく一石屋が座を立つのを待ち、立ち上がって潜り戸の方に歩いて行くのをみ

ると、静かに盆わきを離れて後を追った。潜り戸を出ると、中の喧騒が嘘のように消えて、懸け行燈の明りが、ひっそりと納屋の内を照らしている。

納屋を出ると、一石屋は横手に回って草むらに小便をした。佐之助も横にならんで小便をした。

「ああ負けた、負けた」

一石屋は前を向いたまま言った。

「しかしつきが回ってくるのは、これからでな。うん、これからが面白くなる」

一石屋は、まだまだ帰るつもりはないらしかった。佐之助が終っても、一石屋の小便はながながと続いている。

「あんたどうだね？ 儲かったかね」

一石屋は、腰を振ってようやく小便をしまいにすると、はじめて佐之助を振りむいて言った。

「まあまあですがね。ところで、一石屋の旦那」

佐之助は、納屋に戻ろうとする一石屋の足を、邪魔するように、前に立ち塞がった。さっきの見張りの男は、氣を利かして姿を消している。

「旦那に、折入って話があるんですがね」

「……………」

一石屋は黙って佐之助の顔をみた。それから薄笑いを浮かべた。

「金でも貸せていうのかね。しかし金は……………」